



オリカルクムの記憶

七  
オリカルクムの円盤

峯村  
明

## オリカルクムの記憶 7

登場人物

オリカルクムの円盤

057.

058.

059.

060.

061.

062.

063.

064.

065.

066.

あとがき

奥付

## 登場人物

竜門渕 めるの	湖畔の旧家、竜門渕家の後継者 15歳
竜門渕 遠野	竜門渕家の現在の当主 めるのの曾祖母
河合 保ノ助	湖畔の温泉宿『かわいや』のせがれ 14歳
かわいや	温泉宿『かわいや』の亭主
A. V. ラウレンス	ベルギー人の鉱物学者
おシゲ / 源三	竜門渕家の使用人
星名 千助	アマチュアの鉱物学者
メンドルプ	化学者

## オリカルクムの円盤

057.

「とんでもねえことになってるなあ」と、ヤスウは言った。「なにがとんでもねえって、このくに入るのは、身分証がいらねえんだぜ、おい」

この島国は入出国の手続きがとんでもなく厳しかったのである。かつては。

「そうでした！ ヤスウさまの身分証は私がお預かりしたままでしたわ！」

めるのはミツハといっしょにいると言葉遣いもしぐさも格段に上品になってしまう自分を発見する。

「なあに。いってことよ」照れ臭げな表情はヤスウも保ノ助も同じだ。

「どの道、あの身分証はもう使えねえよ。評議会そのものがなくなっちゃったんだから」

彼はまじめな面持ちで頭を振った。とにかく口が軽く、言わなくてもいいことまで喋ってしまうヤスウが、遠い大陸で消えてなくなったものについて、こののちほとんど口にできなかったことが、彼の受けたショックの大きさを物語っていた。

「ま、そんなわけでき、とすぐに軽いヤスウに戻る。「このお方の入国もじつにらくちんだったのさ」

ヤスウはようやくその『お方』を紹介した。ふさふさとした長髪も長いひげも眉も真っ白、藍色の目がきらきらと輝いている。異国の老人である。

「メンドルプ博士ってんだ。偉い学者先生なんだぜ」

メンドルプ博士はどことなくうわの空ながら、笑顔を見せ、「どうぞお見知りおきを」とつぶやいた。しかしその視線はずっと、ミツハの手元に注がれている。

「博士がそいつを見つけたんだ。どうしてもつかまえるんだって聞かなくて、でも、どうしても近寄れなくて、とうとうここまで来ちゃった」

「近寄れない、ですって？」ミツハは不思議そうに訊き、ヤスウはうなずいた。

メンドルプ老人はごくりと喉を鳴らした。見ず知らずの異国の地で、慎ましやかにふるまっているが、瞳からあふれる光は好奇心そのものだ。

「娘さんや、『それ』が何だか、ご存知か」

「いえ——」

「私は若い頃にいちどだけ、見たことがある。その色、輝き、間違いない。其は、オリカルクムなり」

058.

メンドルプの声は知的で、力強い。

「もともと、私が見たのはもっと小さかった。おそらく指輪のようなものだったのではないか。今そなたが手にしている『それ』は、まったくの別物だ。……ああ！」、と彼は両手を揉みしだいた。「どうか、よく見せてもらえまいか」

拒む理由もなく、ミツハは『それ』を両手の平に載せて差し出した。傍から見れば、きれいな蝶を見せてくれと、子どもが熱心にせがんでいるみたいだ。

メンドルプは息をするのも忘れて、憑かれたように目を見開き、『それ』に見入った。そろそろと手を持ち上げ、「さわっても、いいかね」とたずねる。

拒む理由もなく、ミツハはうなずいた。が——

メンドルプが触れようとしたとたん。バチッと火花が飛んだ。

老人は「ああ」と呻いて手をひっこめ、呆然と後ずさった。

「博士……」ヤスウの心配げな声。

「……やはり、な」メンドルプは、まなざしを『それ』からミツハに移し、言った。「そなたは平気なのだな」

「あの……先程も、近寄れない、と仰ってませんでしたか」

「うむ……触ろうとすると今のような反応が起きるのだ。私だけではない、ヤスウもな」

「ああ。おれなんか、火花が飛ぶどころか弾き飛ばされた」

「どういうことでしょう——」

「ありていに言って、相手を選ぶということでしょうな」

「はあ」

「博士、こいつ、選ぶの、人だけじゃねえよね。おれたち、ずっと海の上を追いかけてきた。海に落ちてもよさそうなもんなのに、こんな世界の果ての島の、小さい湖に、狙ったように落ちるなんてさ」

本気とも戯言ともつかない、いつものヤスウの口調である。

メンドルフは『それ』に目をすえたままため息をついてから言った。「ここへ、来たかった、のではないかな」

「あ……どしたんだミツハさん！ だいじょうぶかい！？」

『それ』を胸に抱いたまま、ミツハはとつぜん気を失ってくずおれた。

## 059.

体の中で、遠く、声が響いている。

水の精霊よ、とその声は呼びかけてきた。

其は 火にして熱

其は 己を制御できずに 負の方向へ 力を暴走させた

結果 太陽を閉ざし 大気をかきまわし 夏の氷を生んだ

多くの生命が奪われた

生命の連鎖が行われなくなった

このような事態を招いた罪は 重い

我々はふたたび 『それ』を円のなかに封じる

待って！！

待ってください！ これはあの子なのね！？ 一体、何が彼を暴走させたというの！？ 何があったの！？

悲劇が

悲劇の終わりに 彼は嘆いた

この氷雪の世界は 彼の心象風景そのもの

水の精霊よ

このような事態を招いた責は彼だけにあるのではない 我々もまた 未熟であったのだ

彼を封じるのは これ以上の苦しみを味あわせたくないからだ

彼に必要なのは 長の眠り

すなわち

死

060.

この中に火の精霊が封じられている

そのようなことができるのは、神々だけ

なんとなれば、オリカルクムは神々の手によるもの

061.

(彼が大きな力を持っていることは生まれた直後にわかりました。むずかっただけで世界の半分が燃えてしまったのでした……)

うむ、と相手が首肯する気配

そして此度は世界の半分以上を凍らせてしまった

水の精霊よ、と相手は語りかけてきた

元素霊は世界のために存在する

世界を壊して なんとする

ミツハは返す言葉もなくなされた。これ程打ちのめされたことはなかった。知る由もないが、かの大陸で核爆弾が破裂し、地上は生き物が住めない。それに匹敵する状況が、今世界各地を襲っていた。

世界中の元素霊に召集がかかっている

人間と暮らしていたそなたは知らなかったようであるが



えっ、とミツハは面をあげた。

観よ と相手は言った

062.

暗闇。ただの闇ではない。目を凝らすと、そこそこに微細な光があるとわかる。星空のようだが違う。微細な光点は下にある。芳醇な香りに満ちている。

光が砕けてさらに細かくなり、ミツハの足元にやってくる。それはきらきらと様々な色に輝き、踊る。きらめく光の粒子は闇のなかに踊り、ミツハを魅了し、語りかけてくる。

目覚めよ

呼吸せよ

光に、触れたいという衝動を覚える。触れ、自分のものにしたい衝動は抑えきれないほど強く、逆らえず、ついにミツハは手を伸ばす。

光はミツハの指先に触れ、体内に取り込まれ、しかし、衝動はおさまるところかさらに強くなる。心臓は高鳴り、空気を求めて呼吸が早まる。次なる衝動は、手を上に伸ばすことだ。上には、もっと——心惹かれるものがある——

手は暗闇を突き破る。暗闇には抵抗する力があつたが、突き破った先にはなにもなかった。いや、光しかなかった。光が満ちあふれ輝いている。あまりの眩しさにミツハは目を瞠り、瞑る。しかし光はおまえを傷つけるものではないと誰かがささやく。光によって、おまえはあるべき姿に目覚めるのだ。

光とともに、霧に包まれるような、湿気。心地よい湿気は、闇のなかで光に触れたいと感じたあのと  
き以上の衝動をもたらした。

あるべき姿に目覚めるのだ

両足のつま先から両手の指先、髪の一筋一筋に至るまで、全身に漲る力を感じる。全身を駆け巡る力が外へ向かって、爆発するかのように、放出される。

みるみる体が伸び、拡がり、変わっていく。

それはミツハ自身が竜の姿に変身するときの様子に似ていたが、どこかが違っていた。足元と頭上からは常にエネルギーが送り込まれてくる。足元のそれは力強く上へ押し上げ、頭上のそれは上方への進展を促す暖かみである。

呼吸せよ そう促されるまでもなく、かぐわしい気体を吸い込まずにいられない。そして吐き出す。呼吸と胸の高鳴りは生きている証しなのだと感じる。感じる。生きていることの歓喜、漲るエネルギーを。

そしてミツハは、水面に映る自分が美しい紅色の花をつけたたおやかな植物なのだと知るのだ。

\*

目覚めに向けて力をつくせ

精神のなかで考えよ

創造的に呼吸する存在を生きよ

愛しつつ 神々の意志の力を受け取れ

(※・あとがき参照)

063.

元素霊のはたらきなくして 世界は成り立たぬ  
元素霊がひとり欠けても植物は育たないのだ  
と相手は言う

そなたはそのひとり 水の精霊よ 則(のり)を越えてはならぬ

相手の言葉は頬を打つように厳しいものだったが、波動は柔らかかった。ミツハは呆然と柔らかな波に包まれる自身を感じる。

地球の再生に加わるのだ、と相手は言った。そなたの本来の使命を生きよ、と。

064.

行ってしまうのね——ミツハさん——

めるのは呆然とつぶやいていた。

(精霊の身であったにもかかわらず、私は人間に近づき過ぎました。則(のり)を越えてはならないとは、そういうこと)

あなたは——わたしを助けてくれた——

どうに過ぎ去ったことなのに——そうわかっていながら、目の前に迫ったミツハとの別れはめるのを揺るがせた。とつぜんのことに頭は空白、涙も湧いてこないこのときの自分に、めるのはすっかり重なってしまっている。

(泥の沼にいたあなたの姿が……息子と重なって……手を差し出さずにいられなかった。めるの、あなたの体はあのおとき失われました。この体でよければあなたにあげましょう)

ワニがうようよしていたあの泥沼で、金髪色白で肉厚の自分の体がどうなったのか考えたくもなかったが、そんなことを考える隙もないほどめるのはミツハと一体だった。むしろ、軽くてたおやかなこの体が気に入っていた。ミツハの申し出に、なんの異存があるだろう。そして今現在の己の容貌、体型が、ミツハとメルノふたりの要素が重なり合ったものであることに気づくのである。

(私が去っても、めるの、あなたはひとりではないわ)ミツハは穏やかに言う。(あなたの危機に必ず駆けつけてくれるひとがいる)

めるのは知った。竜門淵の始祖とは自分自身だったということ。

ミツハが去って、長い時間が流れた。めるのはひとりになったが、それでも『私はあなた』であり『あなたは私』だったのだ。

(あなたに秘密を打ち明けましょう。元素霊が愛した素材には元素霊の愛が残ります)

(ホシナ族が愛した石、シトリ族が愛した植物、私が愛した水。それらには愛が宿ります。そこに人が生きる限り、永遠に。だからこの世界の果ての島は特別なのですよ)

めるのはおずおずと尋ねた。そこには元素霊が三人しかいない。四人目は？ 火の精霊は？

(あなたの手の中に)

(かつて私は、神々を恨みました。神々は私から息子を奪った憎い存在でした。その気持ちはどんなに時間が経とうと薄れることはなかった。事あるごとに心の奥底から浮かび上がってきて、私を苦しめた。けれど……いくつかの事が私の気持ちを変えました。

ひとつは、名前を持たない息子に、人間の誰かが名前をつけ、息子はそれを受け取ったということです。

もうひとつは、息子が本当の父親に出会っていたことです。父親は息子と心通わせようとしたのですが、息子の方が拒んだのだ、と)

めるのはそう知った時のミツハを理解しようと、彼女の心情に重なろうとするがうまくいかない。滑ってしまう感覚があるだけだ。それだけに、母親としてのミツハは何を思ったのかと興味を覚える。

私は……とミツハは言葉を選んでいる。

(神々に対する私の憎しみも苦しみも関係なく、彼らは彼らの道を行くのだと、胸落ちしました。ただ、そうあるだけ、生命あるものはその生命を生きるだけなのだ、と。だから私は、息子を授けてくれたひとを、息子そのものを……)

ミツハの言葉にならない心情は、柔らかく温かな、紅色だった。それは彼女の息子と父親に共通する瞳の色なのだとめるのは知る。

しばらく言葉を詰まらせてからミツハは言った。(息子に名前をくれたひとには、いつか、会いに行きたいものです。息子はそのひとと共に生きることを望んでいる。望みはかなえられるだろう、神々はそうおっしゃいました——)

## 066.

金と緑色が入り混じった光を通して、オリカルクムの円盤の表面に微妙な凹凸があるのを見つけたのはメンドルプだった。

「こんな形がうかんでいるのだ」と、彼は頭の上で手の平どうしを少し離して平行にし、ゆっくり右へ、次に左へ、くねらせながらそのあたりまでおろした。両手でゆるい『S』の字を書いた格好だ。恰幅のいい堂々とした体躯のメンドルプのその仕草があまりにおかしかったので、ヤスウは笑わずにいられなかった。ひとしきり笑ってから、ヤスウもまたまじまじと円盤の表面をのぞき込み、言った。

「イモリですよ、これ」「イモリ! ?」「ほら前脚と後ろ脚がある。地球儀の表面に貼りついてたっけなあ、こんな格好して」「地球儀に? それはまた変わったイモリであるな」

そこには火の精霊サラマンダーが眠っている。

\*

少しずつ、気温が上がり、元の気候に戻る兆候が現れたころ、流刑になっていたゴンが戻って来た。着の身着のまま湖畔に避難した人々には、斧やナイフといった様々な道具が必要だったし、食糧は植物だけではとても足りず、動物から補給するしかなかった。もともと、ホシナ族から伝授されたゴンの石器製作技術は大いに役立った。

ゴンが作った石の箱の中に、めるのの手でオリカルクムの円盤は収められた。メンドルプは日がない一日、それを眺めて過ごし、ある日、ついに立ち上がった。彼は少年のように頬を紅潮させ、宣言した。

「わたしはこれを再構築する!!」

メンドルプの化学者魂に火が点いてしまったのだった。

7・「オリカルクムの円盤」

8・「キリガミネ探訪」へ続く



## あとがき

※ No.062・『目覚めに向けて～受け取れ』は

Rudolf Steiner

Engel und Elementalwesen 「天使と元素の存在(邦題:天使たち妖精たち)」より四大元素霊の合唱。上からそれぞれ土、水、空気、火の精霊。

『元素霊とは天界の天使から分離して自然界に入った、目に見えない存在。

天使が人間をはるかに凌駕する、崇高で善なる存在であるのに対し、元素霊は人間とほぼ同等の段階にある者たちであり、善にも悪にもなる』

水つ早町のモデル諏訪は本当に不思議なところ。古事記・国譲りの段で天神タケミカヅチとの争いに負けたタケミナカタが逃げ込んだ地であるといえます。(ホツマツタエと古事記とはほぼ同じ内容。日本書紀にこの話はありません)

スワにやって来たタケミナカタは地元のモリヤ神の抵抗に遭います。モリヤ神が象徴するのがミシャグジでして、これがひじょうに古い、石に降りる神、森に住まう神でした。ミシャグジは古いうえにひじょうに力が強く、タケミナカタは無視できず、結局諏訪大社の祭政体はミシャグジ神を中心に営まれてきた。そのミシャグジ神の祭祀権を持っていたのが守矢神長官家、モリヤ神の子孫で、実際近世まで続いていました。

文字のない時代からミシャグジという音のみで残っている謎の神さまで、軽々しく扱うとたたる、そうです。

何の気なしにこういった資料を目にしていた筆者は、あれ？、と思いました。

冒頭の「天使と元素の存在」のなかに、「人間が妖精(元素霊)から得るばかりで、何も贈り与えないと、彼らは人間に悪意を抱く」という一節があるのです。目に見えず、あきらかに何らかの力がある、でもメンタリティは人間とあまり変わらない。

そこで、石に降りる神＝ミシャグジ＝土の元素霊＝ホシナ というフィクションが浮かんできたわけです。

諏訪周辺には黒曜石原産地や古代の石器加工場と思われる跡がたくさんあるのですが、石に降りる神＝ミシャグジとなにか関係があるように思われてなりません。

2024年11月8日 記



## 奥付

オリカルクムの記憶

7・オリカルクムの円盤

2024年11月15日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材 [「素材good」](#)

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社